［対談シリーズ］

音語り（おとがた）——小山実稚恵と仲間たち

第11回——ゲスト●広上淳一さん

テーマ●私の好きなラフマニノフ

ききて・構成＝山野雄大
写真＝堀田力丸

ピアニストの小山実稚恵さんが、さまざまな音楽家をお招きして、こだわりのトークを展開するというこの連載。第11回のゲストは、指揮者の広上淳一さん。ピアノ曲もオーケストラ曲も高い演奏頻度を誇る人気作曲家にして19～20世紀最大のピアニストの一人でありながら、作曲家としての評価はときに相半ばするラフマニノフについてお話しいただきました。

ラフマニノフの望郷の思い

小山　広上さんは、ラフマニノフのピアノ協奏曲第3番を、ゆっくりだけどピアノ・パートを全曲弾かれるんですよね。

広上　そう。僕はノールショピング響時代（1991～95年・首席指揮者）に、テレビもなにもなくて時間だけはあるので「ピアニストはどれだけ辛い思いでやっているのかを知ってみよう」と思って、3、4ヶ月かけて3番のピアノ・パー

小山　ラフマニノフは楽器をよく知っているし、どうやったらよく鳴るかを非常に分かっていて、本当に心地良いんです。世の中には、努力しても近づけないものはあるのですが、ラフマニノフは少しずつでも努力して磨いていけば報われる。習得したいという気持ちを持って挑む人には優しい作曲家ではある。難しい作品なのに弾く人を後押ししてくれるようなところがあって。

広上　弾いてみたい！（笑）ああいう曲をピアノで弾ける人は本当に幸せだろうなと思います。ラフマニノフのピアノ協奏曲はオーケストラと共演するのも大変な曲で、ピアニストとオーケストラで一緒に創るオペラみたいなもの。ピアニストがアリアやレチタティーヴォを歌うところへ、われわれもサポートだけではなく一緒に音楽をやらせていただくような感覚があります。

いメンタルが、好きですね。〝あぁ、どうしよう、どうしよう……〟とうねるように、でも先へゆくような音楽。いいですよねぇ。

小山　ほんとにいいですよねぇ。

広上　これは想像ですけど、ショスタコーヴィチは戦争で人が死ぬのを見ても、それを題材に音楽が書ける人。でもラフマニノフは、そうなったらペンはとらないタイプですよね。

小山　ああ、なるほど！

広上　プロコフィエフにもそんなところがあったかも知れないけど、ショスタコーヴィチは自分を斬って流れる血を観察しながらも曲が書けた作曲家だと思う。彼の音楽には血の音がする。しかしラフマニノフの作品には、どんなに悲しくて哀愁漂うことがあっても、血の音がない。必ずそこに美を残している。

小山　いや、すばらしい。おっしゃるとおりだと思います。ショスタコーヴィチって縦の音楽じゃないですか。それに対してラフマニノフって横の音楽で……

広上　やはりチャイコフスキーからの流れですよね。

小山　戦争とか血には拒絶反応が出るような、本当に繊細な人だった……

広上　《パガニーニの主題による狂詩曲》でもそうですが、悪魔的に激しく鳴るところでも必ず美しさがあるでしょう。ショパンにしてもチャイコフスキーにしてもラフマニノフにしても、そのように書かれた音楽はやはりそのような聴き方を前提としなければと思います。

て影のように寄り添っていく。その先でピアノは激しく動くわけですが、ピアニストがどんなにヴィルトゥオーゾ的に動き回っても、必ずそれを掬える位置にオーケストラが影のように待っている、ということも表現しなければいけない。

小山　なるほど。

広上　さらに、オーケストラが一生懸命に料理をつくって出してみたら、ソロからもっと凄い究極の寿司が出てくるようなところがあるでしょう（笑）。ラフマニノフ自身がピアニストであったこともあって、そのあたりをまったくないがしろにしていない。ピアノがオーケストラの一部になったり、抜け出てきたり、また入り込んだり……そして最後は合体なんです。

迷いと勇気と美しさと

小山　評価の話に戻りますけど……ショパンのピアノ協奏曲の前奏って今は誰もカットしなくなりましたが、以前はカットされることがあった。

広上　はやってたね、カット。「もう前奏はいいからピアニスト早く聴かせろ！」みたいな風潮だったんでしょうね（笑）。

小山　あの前奏は〝ポーランドの誇り〟だと思うんです。でも昔は10回やったら9回はカットが入っていた。……今はカットしないという機運になったから皆さんそうするけど、ところが広上さんはその頃から「僕はこのコンチェルトはすばらしい曲だと思うし大好きなんだ」とおっしゃって絶対にカットしなかった。

広上　だってやりたいんだもん、あの最初のところ。オーケストレーションがよくないとかいろいろ言われますけど、つねに美しい。ピアノが出てくるまでの長い前奏も、あのちょっとくすんだ色がショパンであって、書かれたとおりにやるべきなんです。カットするなんて失礼ですよ。

小山　このショパンの話と、さきほどのラフマニノフへの評価の話は同じ種類のことだと思うんです。自分は何が良いと感じるのかということ、自分の感覚との合致、そこを貫くということ。……音楽はやはりそこしかないと思うし、人になんと言われようと良いものは良いと。そして、この二人の作曲家の比較でもうひとつ言うと、ショパンは毅然として迷わないところがある。ラフマニノフは迷いもしただろうし傷ついてもいたけれども、時代的に新しくはなくとも、自分の信ずるロマンティックなものを追い求めて書き続けた。その不安のなかの勇気に、私も惹かれていると思うんです。

広上　まったくおっしゃるとおりだと思います。ショパンには、誰がなんと言おうと糞を喰らえという決然としたものがありましたが（笑）、ラフマニノフは人の評価の影響を非常に受けやすく、迷う人なんですね。だけど僕はそういう優し

Junichi Hirokami
東京生まれ。東京音楽大学指揮科卒業。1984年第1回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクールで優勝し、国際的な活動を開始。91～95年ノールショピング響首席指揮者、98～2000年リンブルク響首席指揮者、97～2001年ロイヤル・リヴァプール・フィル首席客演指揮者、91～2000年日本フィル正指揮者、06～08年コロンバス響音楽監督を歴任。近年では、ヴァンクーヴァー響、ミラノ・ジュゼッペ・ヴェルディ響、サンクト・ペテルブルク・フィル、ボルティモア響、シンシナティ響、スタヴァンゲル響、ライプツィヒ・ゲヴァントハウス管、ポーランド放送響、スロヴェニア・フィル、サンパウロ響などへ客演。国内では全国各地のオーケストラをはじめ、サイトウ・キネン・オーケストラや水戸室内管弦楽団を指揮している。2008年より京都市交響楽団常任指揮者を務め、14年からはミュージック・アドヴァイザーを兼任。15年には同響とともにサントリー音楽賞を受賞した。東京音楽大学指揮科教授。

＜広上淳一　公演情報＞

■日本・ノルウェー友好コンサートin京都
◎3月25日（金）19:00　京都コンサートホール・アンサンブルホールムラタ
ハラルド・ナエス(tp)京都市ジュニアオーケストラ，トロンハイム・ジュニア・ソロイスツ
芥川也寸志：トリプティーク，成田為三（森孝雄編）：浜辺の歌，岡野貞一（森孝雄編）：ふるさと，グリーグ：2つの旋律
問い合わせTEL 03-5211-5290

■オーケストラ・ディスカバリー2015「オーケストラ大発見！」
◎3月27日（日）14:00　京都コンサートホール
京都市交響楽団，安井陽子(S)福原寿美枝(Ms)錦織健(T)
モーツァルト：歌劇《フィガロの結婚》序曲，交響曲第41番《ジュピター》～第1楽章，ベートーヴェン：交響曲第9番《合唱付》～第4楽章，他
問い合わせTEL 075-711-3110

■京都市交響楽団
◎4月15日（金）19:00　京都コンサートホール
コープランド：市民のためのファンファーレ，モーツァルト：交響曲第41番《ジュピター》，R.シュトラウス：交響詩《ツァラトゥストラはかく語りき》
◎4月17日（日）14:00　ザ・シンフォニーホール
アレシュ・バールタ(org)
R.シュトラウス：交響詩《ツァラトゥストラはかく語りき》，サン＝サーンス：交響曲第3番《オルガン》
問い合わせTEL 075-711-3110（4/15），06-6453-6000（4/17）

かすると……

広上　いないかも知れないね。

小山　ラフマニノフに一番厳しいのが批評のかたで、次に指揮者。だけど、私の知っている作曲家のかたにはラフマニノフを絶賛されるかたが多いんです。

広上　分かります。ひとつ挙げると、ラフマニノフのオーケストレーションには無駄がないんです。よく鳴るんだけどそんなに無茶なことはしていない。

小山　ピアノにも無駄がないんです。ラフマニノフ自身は手が大きくて、片手でドから（1オクターヴ上の）ファやソまで届いたといいますが、私はドから（1オクターヴ上の）レまで、ミになるとちょっと……というところなんですが、それなのに弾きやすい。

広上　手にはまるように書いてあるわけでしょう?

小山　もっと狭い音程で書かれているのに弾きにくい作曲家もたくさんいるなかで、ラフマニノフは楽器をよく知っているし、どうやったらよく鳴るかを非常に分かっていて、本当に心地良いんです。世の中には、努力しても近づけないものはあるのですが、ラフマニノフは少しずつでも努力して磨いていけば報われる、近づきやすい作曲家なのかなと感じます。だから、習得したいという気持ちを持って挑む人には優しい作曲家ではある。難しい作品なのに弾く人を後押ししてくれるようなところがあって。

広上　弾いてみたい！（笑）ああいう曲をピアノで弾ける人は本当に幸せだろうなと思います。

小山　幸せですよ！（笑）

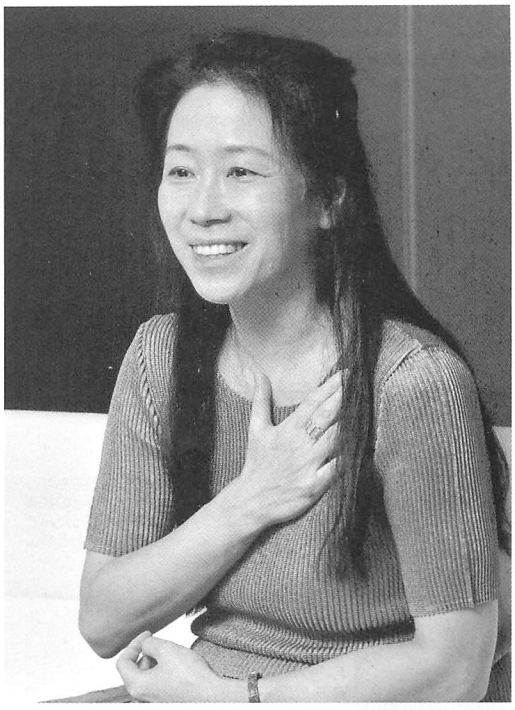
広上　ラフマニノフのピアノ協奏曲はオーケストラと共演するのも大変な曲で、ピアニストとオーケストラで一緒に創るオペラみたいなもの。ピアニストがアリアやレチタティーヴォを歌うところへ、われわれもサポートだけではなく一緒に音楽をやらせていただくような感覚があります。

小山　どの作曲家のコンチェルトも対話という意味では変わらないんですけれども、ラフマニノフの場合は、ソロのヴィルトゥオーゾなところもありながら、オーケストラと寄り添うところが非常に多いです。ソロがかなり細やかに動いて一見ピアニスティックなところでも、カデンツァを除くとじつはほとんどオーケストラの一部でありうるように書いてある。

広上　うん、うん。

小山　そうすると、もちろんピアノ・パートに書かれていることはぜんぶ弾かなければいけないわけですが、そのぜんぶを聴かせていくのか、という問題になってくる。それは簡単に言ってしまえば音量的な強弱の問題でもあるし、重要度の強弱の話でもあるわけです。立体的で説得力をもった表現をつくっていく上で、オーケストラがイニシアティヴを持っているところでも、それはピアノでもおこなわれなければならない。

広上　ラフマニノフのピアノ協奏曲第3番は、オーケストラの前奏が2小節しかないですよね。あれ、あんまり気にしないで振る指揮者も多いんだけど、これをどうつくるかは凄く大事なんですよね。その大事につくったものをピアニストへリレーのように渡してから、背後に入っ



Michie Koyama

東京藝術大学および同大学院修了。吉田見知子、田村宏両氏に師事。1982年チャイコフスキー国際コンクール・ピアノ部門第3位、85年ショパン国際コンクール第4位。2006年から2017年までの12年間全24回、オーチャードホールで春秋の年2回ずつ行なうリサイタル・シリーズ「小山実稚恵の世界」は現在全国6都市（東京、大阪、札幌、仙台、名古屋、福岡）で進行中。2015年にはデビュー30周年を迎えた。2011年の東日本大震災以降、東北出身ということもあり、被災地の学校や公共施設などで演奏を続けている。ソニー・ミュージックジャパンインターナショナル専属契約アーティスト。『シャコンヌ』で2013年度レコード・アカデミー賞器楽曲部門受賞。2015年4月には28枚目となるアルバム『シューベルト：即興曲集』をリリースした。2015年NHK交響楽団「有馬賞」、2015年度文化庁芸術祭音楽部門優秀賞、2015年度ミュージック・ペンクラブ音楽賞受賞。

＜小山実稚恵　公演情報＞

■田村宏 メモリアルコンサート

◎3月21日（月・祝）14:00　東京文化会館（小）

富山県民謡（間宮芳生）：さんさい踊り（2台のピアノ，3人のピアニストによる6手のための編曲），ベートーヴェン（間宮芳生編曲）：交響曲第5番《運命》（2台のピアノ，3人のピアニストによる6手のための編曲）

問い合わせ℡03-3560-3010

■トヨタ・マスター・プレイヤーズ，ウィーン

◎3月29日（火）19:00　岩手県民会館

◎4月1日（金）19:00　札幌コンサートホールKitara

ベートーヴェン：ピアノ協奏曲第5番《皇帝》

問い合わせ℡019-653-4121（3/29），011-241-5161（4/1）

■小山実稚恵ピアノ・リサイタル ～ピアノお披露目コンサート～

◎4月10日（日）14:00　くれ絆ホール

シューベルト：即興曲Op.142-2，同Op.90-1，同Op.90-2，同Op.142-3，バルトーク：ソナタ，ショパン：夜想曲第21番，同第13番，：ワルツ第17番，同第7番，同第6番《小犬のワルツ》，同第2番《華麗なる円舞曲》，ピアノ協奏曲第2番～第2楽章，ポロネーズ第6番《英雄》

問い合わせ℡0823-25-7878

トを練習していた。オケの練習が終わると指揮者室でずーっと弾いていて……あれは今でも自分に対する誇りですね。（突然、親友・大野和士の声真似で）あの曲は大変ですよねぇ……（笑）

小山　そっくり！（笑）

広上　（自分の声に戻って）やはりピアニストにとって3番は特別な曲でしょ？

小山　特別です。ベートーヴェンを弾いたり聴いたりすると「音楽やっててよかった……」と思うし、バッハだと「生命体でよかった……」と思うんですけど（笑）、ラフマニノフの場合は「ああ、ピアノをやれててよかった……」って思う。

広上　それはショパンと違う意味で？

小山　ショパンもそうです。このふたりを比べるなら、ショパンには彼としてのひとつの世界があるけれども、ラフマニノフの場合、ロシアから亡命して新天地へ……ということもあったためか、どこかエキゾティックな感興があるように感じますね。違う大陸から遠く想いを馳せているようなところが、たまらなくいいんです。

広上　うん、うん。

小山　ポーランドからパリへ移ったショパンは、同じヨーロッパの香りの中での故郷への想いを自分の世界の中で咀嚼している感じ。ラフマニノフは望郷の想いが曲にも反映していて、随所でロシアへの感情が噴き出しているように思いますね。

広上　ラフマニノフの真骨頂であるピアノ曲には、ピアニストとしての考えも入っているでしょうから、「ハウステンボス」のようにテーマ性がしっかりある中でいろいろな要素がひとつの世界を成している。一方で交響曲や管弦楽作品には、マイケル・ジャクソンがつくった「ネヴァーランド」のようなところがあって、もっといろいろなものが溢れるように世界を創り上げているところがあるんじゃないのかな。

小山　おお、なるほど。

広上　あの時代に決して無調にもいかず、チャイコフスキー以来のものを守りぬいて美しい作品にこだわったというのが、僕は大好きなんです。彼の管弦楽作品は、ピアノ曲にはかなわないにしても、もっと評価が高くなっていいと思う。なかでも《シンフォニック・ダンス》は渋いけれども、作品としての価値は3曲の交響曲より上でしょうね。

小山　いい曲ですよね！　2台ピアノ版もありますね。

広上　口の悪い評論家は、ハリウッドの映画音楽のようだと言ったりもしますが、じゃあ映画音楽は悪いのかという話になってくるでしょう？　映画音楽は悪いはずはなくて、優れた作品なんです。衒学的な意識でラフマニノフを評価してしまうのは、本当の意味で聴けていないのではないかと思う。

小山　まさにおっしゃるとおりで、映画音楽的なものの何がおかしいのかと思うんです。映画音楽のすばらしさって凄いじゃないですか。映画にとってそれを引き立たせる音楽は無くてはならないもので、〝映画音楽〟とくくって考えてしまうこと自体もおかしいし、〝映画音楽のよう〟という評価も、ね。

寄り添い合う ピアノとオーケストラ

小山　でも指揮者のかたで広上さんほどラフマニノフを賛美されるかたも、もし

私の好きなラフマニノフ

【広上淳一さんの愛聴盤3点】

ラフマニノフ／交響曲全集
ヴラディーミル・アシュケナージ指揮アムステルダム・コンセルトヘボウo
〈録音：1980年11月～82年8月〉
[デッカⒹUCCD5521～2]
●コンクール（第1回キリル・コンドラシン国際青年指揮者コンクール）で優勝したあと、コンセルトヘボウ管弦楽団でヴァイオリンを弾いているかたとドライヴをしている時、たまたまFMラジオで交響曲第2番の第3楽章が流れてきた。僕はその時この曲を知らなくて「いい曲だねぇ……」と。隣のかたも曲名をご存じなくて、ふたりで放送を最後まで聴いていたら、数日前までコンクールの審査員をやっていたアシュケナージ先生が指揮するコンセルトヘボウ管弦楽団の演奏だと紹介されて、そうしたらそのヴァイオリニストも「あら、私これ弾いてる！」って（笑）。すぐ全集のレコードを買いました。

ラフマニノフ：ピアノ協奏曲第2番
ヴラディーミル・アシュケナージ(p)キリル・コンドラシン指揮モスクワo
〈録音：1963年9, 10月〉
[デッカⒹUCCD4402]
●自分が受けた指揮コンクールの名前にもなっているコンドラシンと、アシュケナージとの共演盤があるというのを、僕は後になって知ったんです。すみませんでした……という思いとともに（笑）オマージュとしてこの録音を挙げたいと思います。

ラフマニノフ：チェロ・ソナタ
アレクサンドル・クニャーゼフ(vc)ニコライ・ルガンスキー(p)
〈録音：2006年7月〉
[ワーナー・クラシックスⒹWPCS22190]
●広上「ラフマニノフといえばピアノじゃないですか。それなのにチェロ曲を書いていたんだ！という意外性がありますね」。小山「ルガンスキーのピアノも終楽章の左手とか鮮やかですよね」。広上「実稚恵ちゃんこの曲は？」。小山「堤剛先生と共演させていただいて」。広上「おお、それは凄い！」。小山「ほんとうに難しい曲ですけど、第3楽章とか死にそうなくらいすばらしい名曲です！」

【小山実稚恵さんの愛聴盤3点】

ラフマニノフ：①ピアノ協奏曲第2番②同第3番
セルゲイ・ラフマニノフ(p)①レオポルド・ストコフスキー指揮②ユージン・オーマンディ指揮、フィラデルフィアo
〈録音：①1929年4月10, 13日②39年12月4日, 40年2月24日〉
[RCAⓂSICC1300～09]※セルゲイ・ラフマニノフ全集
●広上「自作自演を聴くと、ラフマニノフは照れ屋さんだったのかなと思いますね。作曲も指揮もできてピアノも凄いヴィルトゥオーゾだったにしても、慎みというか……」。小山「涼やかなところがね」。広上「書かれている音はゴージャスなものを想定しているでしょうけど、恥ずかしがって弾いているような気もする」。小山「スピーディで洗練されているようにも思いますね」。広上「照れ屋だから早く終わりたいんじゃないかな（笑）」

ラフマニノフ：①ピアノ協奏曲第1番②同第4番
セルゲイ・ラフマニノフ(p)ユージン・オーマンディ指揮フィラデルフィアo
〈録音：①1939年12月4日, 40年2月24日②41年12月20日〉
[RCAⓂSICC1300～09]※セルゲイ・ラフマニノフ全集
●広上「実稚恵ちゃん1番は弾いたことある？」。小山「1番も4番もないんですよ。弾く機会があるとどうしても好きすぎちゃう3番を選んでしまうので（笑）」。広上「僕は4番はやったことがないんですが、一度だけ1番をやったことがあって、これも悪くない作品ですね」

ピアノ・ソロ曲（ラフマニノフやリストの小品, シューマン：謝肉祭, など）
〈録音：1919～42年〉
[RCAⓂSICC1300～09]※セルゲイ・ラフマニノフ全集
●小山「シューマンはもちろんリストもすばらしいんですよ」。広上「人の作品だとピアニストになるんだよね」。小山「そうかも知れない！　粋っていうのかな、スピーディな演奏には生々しさがなくて、手の内に入っているというか、聴いているとピアノが小さく感じます」。広上「格闘してないんだね（笑）」。小山「そう。ヴィルトゥオーゾでありながら洒脱でシャープ。ただ速いだけでなく全体も見えている。粋を超えて〝小粋〟なのかも知れませんよ、これは」